

座 談 会

明治と令和・看護に通底するもの 大関和と鈴木雅の実像を考える

明治の看護婦・大関和と鈴木雅^{おおせきちか すずきまさ}、二人のトレインドナースをモデルにしたテレビドラマ「風、薫る」が2026年度前期のNHK朝の連続テレビ小説として制作されることになりました。本作についてNHKでは「実在の人物をモチーフとしますが、激動の時代を生きた二人のナースとその仲間たちの波乱万丈の物語として大胆に再構成します」と紹介されています。テレビドラマを通して初期の看護婦の活動とその人間像が全国で話題になり、社会に広まることの意味は計り知れず大きく、そのことを大変うれしく感じます。とはいえ、このテレビドラマの主人公のモチーフに選ばれ、わが国の看護の歴史にその名を残す活動を行った先人については、一般にはもとより、現代の看護師の間であっても、その存在や活動自体が理解されているとはいえない状況にあります。そこで今回、改めて大関和、鈴木雅の二人の出自から人間像、活動などについて、看護の歴史について研究を続けていらっしゃる先生方にご参集いただき、その実像に迫るために座談会を企画しました。よろしくお願いいたします。(川嶋みどり)

〔司会〕

川嶋みどり KAWASHIMA Midori

川原由佳里 KAWAHARA Yukari
日本赤十字看護大学

鈴木紀子 SUZUKI Noriko
看護史研究会

平尾真智子 HIRAO Machiko
看護史研究会

名原壽子 NAHARA Hisako
看護史研究会

構成 濱崎浩一〔本誌〕

2025年8月8日、千葉県立保健医療大学にて収録

『『オン・ナーシング』発刊に寄せて』 と大関和

川嶋 私は鈴木雅についてはあまり詳しく知らないのですが、大関和については以前から関心をもっています。1974年に医学書院から『実地看護法』が復刻される前のことですが、国立国会図書館に出かけて本を探し出した経験があります。複写の相談をしたところ、最初は「古い本なので複写の際に壊れる危険性があるためできない」と言われましたが、幸い図書館の方に立ち会っていただいて丁寧にコピーして持ち帰ることができました。

そのときに初めて『実地看護法』を読み、

彼女の看護婦としての経験に関する具体的な記述に感動するとともに、それ以来今日まで、看護について考えるときに大関和の活動に立ち返ることが少なくありません。

先日、創刊4年目に入った『オン・ナーシング』の特集に原稿を書いたときのことで(前号参照)。初心をたどるべく創刊号を開くと、私が寄稿した『オン・ナーシング』発刊に

矯風会雑誌』の発刊に取り組んだのかどうかは存じませんが、解かれた年に発刊されたことは事実です。しかも、それは女性看病人として雇われた女性たちの一部の品格に乏しい言動から、看護婦に対する社会からの批判が集中した頃でした。大関はその状況を憂いて、きちんと教育を受けた人たちが看護婦のなかにいるのだから、読者である看護婦たちに向



(左から)川原由佳里、名原壽子、川嶋みどり、平尾真智子、鈴木紀子の各氏

寄せて」の冒頭で、大関和について触れていました。自分で考え、書いたのですが、すっかり失念していたのです(笑)。平塚らいてふの『青鞥』より12年早く、1899(明治32)年に大関和は『看護婦人矯風会雑誌』を発行しました。今回調べたところ、この1899年は、女性が発行人として雑誌出版を申請しても許可されるようになった年です。それまでは、たとえ内容が婦人向けの雑誌であっても、編集・発行人は男性に限られていたのだそうです。それが解かれ、即座に大関が「看護婦人

けて「一に看病、二に薬」として看病の力を発揮するとき、と叱咤激励・変革を呼びかけています。大関は、看護の地位を向上するための手段のひとつとして雑誌を創刊しました。彼女の志と同じく、今日の看護師の意識を変革し、社会の事象を掬いながら現場に還元するよう取り組んでいきたいとの思いから『オン・ナーシング』の創刊に至りました。その意味から、私は創刊号に記した一文を大関の触れて始めたのでした。

わが国の看護教育においては「看護の歴

史・看護史」が必修科目として位置づけられなくなってから久しく、大関和や鈴木雅の名前を知らない看護師がめずらしくない状況です。今回の座談会を通して、すぐれた先人たちの存在を読者に知らしめてほしいと思います。皆さん、さまざまな研究をされていていらっしゃる方なので、お話をとても楽しみにしております。

大関和の出自から

川原 最初に川嶋先生から、お二人の「出自」というお話が出ましたので、まず大関和の出自について申し上げます。

大関和は、1958（安政5）年、^{しもつけのくにくろぼね}下野国黒羽藩の家老・^{おおぜきだん えもん}大関弾右衛門の二女として生まれました。開明派である黒羽藩において、お父様は殖産興業面で非常に貢献なさった方です。関東の藩は会津藩との関係が深い土地柄であり、戊辰戦争時は、父である大関弾右衛門が開明派と幕府側の板挟みになったことは想像に難くありません。そのことの影響があったようで、維新後の1876（明治9）年、大関弾右衛門は50歳で亡くなりました。

大関弾右衛門は、殖産興業の才を見込まれ藩主に仕えていましたが、明治維新の変革に際し藩主を失ってからは、藩制の大きな変革に納得できず、家禄と家・屋敷すべてを返上し、一人扶持——ひとりが生きていけるだけの家禄に減給され、しかも帰農——農民になる決断をしました。このときの実家の没落に関しては、幼少期の大関和にとって大きな出来事として、その後も自身に影響を与えたのではないかと推察します。

大関和は、黒羽藩次席家老の次男・渡辺福之進と結婚し、一男一女（六郎、シン）をもう

けます。六郎は仕事先の東南アジアで亡くなり、シンは病気のため、20歳で他界します。六郎には、大関一郎という長男がいて、この方は明治学院大学を卒業され、四男一女をもうけました。大関一郎については、看護史研究会の記録のなかに、昭和55年頃の写真が残っていますので、おそらくご子息など健在だと思われます。

大関和は二男三女の五人兄弟で、兄弟が二人、姉妹が二人います。長男（兄）・大関福彦（一人扶持しか与えられなかった方です）とは、大正に入ってから東京の貧乏長屋で再会したエピソードが残っています。そのとき復彦は肺病に罹っており、和が日赤病院に入院させましたが、その後、他界します（復彦には家庭があり、長男がいましたが戦死）。他に地元・栃木を中心に多くの親戚がいる状況です。

大関和は、妹・川原こくの次男の家で長く暮らし、1932（昭和7）年、74歳で他界しました。

川嶋 出自を中心にまとめていただきましたが、これらをもとに大関和の人間像についてのご意見、いかがでしょうか。

家老の娘として育った影響の大きさ

鈴木 私は戊辰戦争に関する研究を続けており、その関係でこれまでに福島県の若松城はもとより栃木県では壬生や黒羽城址・黒羽芭蕉の館にも出かけたことがあります。研究のきっかけは、日本医史学会が水戸市で開催されたときのことです。加藤光實先生が「女性看護師の初穂——壬生養生局からトレインドナース大関和」と題し、大関和に関する講演をされました。

平尾 加藤先生のご講演がありましたね。覚

えています。

鈴木 そのときに加藤先生がご講演された内容は後に『とちぎ メディカル ヒストリー』（酒井しず監修，獨協出版会，2013）に収載されていますが，とても印象深いもので，振り返ると，加藤先生のご講演を拝聴したことをきっかけに，私は戊辰戦争に関する研究に取り組むようになりました。

戊辰戦争の際，幕府側の一群は徳川家康を祀る日光東照宮を目指します。その入口が黒羽藩を含む下野国の七藩です。当時，開明派と幕府側の矢面に立たされたのが黒羽藩でした。というのも，黒羽藩15代藩主である大関増裕の部下が勝海舟なのです。

川嶋 そうです。

鈴木 黒羽藩は，幕府軍よりも新政府軍についた方が生活がよくなるなどと口説かれ，そちらになびいていきます。藩主も新政府軍につかざるを得なくなったものの，大関弾右衛門は，その狭間で，武士としての矜持や正義感が問われるさまざまな局面に対し，大変な思いをされた。戊辰戦争の頃という大関和は9歳から10歳くらいですから，大関弾右衛門が苦渋する様子を目の当たりにしたと思われる。大関和は後に，後藤新平をはじめとする明治政府の重鎮を訪ね，看護婦制度の実現について交渉します。そうした際に彼女を突き動かす芯の強さには，家老の娘としての育ちが大きく影響したのではないかと思います。

川嶋 その点，私もまったく同感です。

鈴木 日本の大きな変革期にあって，大関弾右衛門が子どもたちに直接その是非を伝えたとはいわれませんが，苦悩するなかであっても，人としてどうあるべきかを父は子どもたちに姿として示した。大関和の人間性を考え

るときに，戊辰戦争の体験は無視できないと思います。

会津藩・若松城を攻略する際に黒羽藩は参加します。黒羽藩と会津藩とは幕府と一緒に取り組んできたにもかかわらず，時代が変革するなかで黒羽藩は攻める側の一員になったわけです。そのとき，「二君には仕えず」——どんなに貧しくなっても二君には仕えず生きる，大関弾右衛門のこの教えは，大関和の人格形成に大きく影響していて，そこが基本であろうと思います。

名原 振り返ると，戦後，医師が書いた看護の歴史の本が多くあり，そのことも影響したのかもしれませんが，1960年代までに刊行された本のなかには「看護婦は，無学無教養の人がなっているから地位が低い」という趣旨のことが書かれていました。これは誤りであって，この考えかたをひっくり返したのが，当時，保健婦の学習集団・土曜会歴史部会（現在の看護史研究会の前身）の人々による派出看護婦への聞き取り調査でした。この調査によって「明治初期，教育を受けたトレインドナースは，良家の子女で教養ある人々であった」ことが明らかになりました。なお，このときの知見は1968年4月から『看護学雑誌』（医学書院）で1年間の連載としてまとめられ，「日本赤十字社の看護婦養成」を加えて『日本近代看護の夜明け』（1973年）として出版されました。そこで，慈恵（有志共立東京病院看護婦教育所）の平野藤（当時，日本で最初の看護書『看病の心得』〔明治29年〕を執筆）や，同志社の岡本老，桜井の大関和や鈴木雅などの存在が明らかにされたのです。

大関和の行動力とその時代

名原 鈴木先生がおっしゃるとおり、大関和を突き動かす芯の強さがあるからこそ、そのすばらしい行動力につながったのだと思います。看護婦制度の実現のために、当時、内務省衛生局長であった後藤新平に直談判に行き、熱心に説くわけです。しかし、後藤新平は「3年待て」と言う。大関和は3年も待ってられないということで、大日本看護婦人矯風会の設立に動く、この行動力あたりに如実に現れています。

明治33（1900）年に「東京府看護婦規則」が発令されます。大関和はその実現に向けて一生懸命取り組み、後藤新平に訴えたわけです。ではなぜ、後藤新平は大関和を活用しなかったのだろうかという疑問に思っていましたところ、当時、後藤新平は台湾総督府の民生局長になっていて、規則ができたときは国内にいなかったのです。歴史には「もしも」は禁物ですが、もし明治33年に後藤新平が国内で衛生行政に携わっていたとしたら、大関和はどのように行動しただろうと考えずにはられません。

大関和は看護婦制度の実現をめざしたわけですけれども、結局は「取締り規則」になってしまいました。大正4（1915）年には「内務省令看護婦規則」が発令され、その内容は戦後まで基本的には変わることがありません。付則には、地方長官は看護婦資格のない者に対して、当分の間、履歴審査をして看護の業務を免許する准看護婦免状を与えることを認めています。これにより開業医たちは准看護婦を雇用する流れになっていくわけですから、どれほど大関和は悔しかっただろうと思います。

平尾 明治33年の「東京府看護婦規則」から「内務省令看護婦規則」が発令されるまでの間に、おおむね29府県ほどから「看護婦規則」が出ていますが、「東京府看護婦規則」が各府県の「看護婦規則」の基本になっています。ですから「東京府看護婦規則」の影響力はかなり大きかったと思います。「東京府看護婦規則」の付則には、この規則は病院内で医師の働く看護婦には適用されないとあります（第24条）。ですから、これは自由営業をしている派出看護婦会を取り締まるためのものと考えてよいでしょう。

川嶋先生のお話にありましたように、いくつもの派出看護婦会が出てくるなかで、いかなれば看護婦会が“玉石混交”であり、鈴木雅と大関和による派出看護婦会のように、看護倫理まで含めて教育する看護婦会がある一方で、白衣を与えるだけで、知識も技術もない人を派遣し、営利目的だけの悪徳な看護婦会も出てくるわけです。

全国29府県の看護婦規則を見ると、約8割に相当する24府県の看護婦規則に看護婦会または看護婦組合に関する規定が制定されています。これは当時、いかに派出看護婦会が全国へ拡大していたかを示しています。その後、大正4年に「内務省令看護婦規則」が発令され、統一されることとなります。それほど看護婦会の力というか数は強くなっていたのであろうと思います。

——平尾先生がご指摘された“玉石混交”に関して、名原先生のご発言中の「明治初期に良家の子女が看護婦として進まれた」という点から補足いただけますでしょうか。

名原 先ほど申し上げた土曜会歴史部会の研究後、女性史研究家である村上信彦氏は、この時期におけるわが国のトレインドナースの

特徴を2つ挙げています。「彼女たちがその出身階層において旧士族であり、当時の知識階級であったため、西洋直輸入の看護教育も抵抗なく受け入れられる時代であったこと、そして、その行動の精神的支柱となったのは、キリスト教の影響を強く受けた宗教的人道主義であった」とあり、私はとても的確な指摘だと思います。

—ありがとうございます。この後、鈴木雅についてお話し合いいただいた後、キリスト教の影響について伺いたいと思います。一方で、営利目的の看護婦会もあったということですが、それらに関する研究はございますか？

平尾 研究としては多くありませんが、衣食住がすべて賄われ、なおかつ知識も教えてもらえ、そのうえ賃金が多少でも得られるという条件ですから、志を持った女性にとって派出看護婦会は魅力的だったのであろうと思います。そういう少女たちを受け入れ、少しずつ教えて一人前にし、独立できるように育てていく看護婦会は多かったと思います。それは看護婦会の会長の考え方によると思います。会長次第で、少くとも知識に乏しく、技術の不十分な看護師を派遣して、それでお金を取るというような経済原理優先、“安かろう悪かろう”に看護婦会が巻き込まれてしまった状況があったのでしょうか。

—今回のテーマの大関和・鈴木雅が作られた慈善看護婦会は、“玉”という認識でよろしいですね。

平尾 もちろん、“玉”です。

川嶋 最初に大関和や鈴木雅が派出看護婦会を立ち上げたときの理念には、とても高い志がありました。その後、雨後の筍のように派出看護婦会ができ、看護婦を派遣して働かせ、

会長が上前を撥ねるといような経済原理で看護婦を搾取するわけです。その状況をただすために大正4年に「内務省令看護規則」が発令されたというように、私たちはこれまで歴史の流れのなかで理解していました。

しかし、これは役所がそのような状況をおかしいと判断して作られたものではなく、その陰で、さきほどから発言が続いているように、大関和たちがさまざまな働きかけをしています。最初に申しあげました通り、明治32年に『看護婦人矯風会雑誌』を創刊、その後もさまざまな活動を続けます。特に明治42年に原敬が内務大臣のときに直接交渉しますが、そのときの彼女は「一般看護婦を守るためにいかがわしい看護師を取り締められ」と言ったわけです。そういったことが結実して大正4年に「内務省令看護婦規則」の発令に至ります。その陰にあった大関和たちの運動を、私たちはしっかり捉えなければいけないと感じます。

また、このことは現代に通じるのです。今日、看護師派遣業がすごく増えているところであり、その影響については本誌第19号で葛西英子氏が発信されています。

一同 確かにそうですね。

川嶋 お話を伺いしながら、そのようなことを考えました。次に鈴木雅について話し合みましょう。(次号に続く)

明治と令和・ 看護に通底するもの その2

大関和と鈴木雅の実像を考える

今年4月から、明治の看護婦・大関和と鈴木雅、二人のトレインドナースをモデルにしたテレビドラマ「風、薫る」がNHK朝の連続テレビ小説として放送されます。小誌第20号に続く本号座談会では、鈴木雅の出自とともに、今日からみた草創期の看護についてお話し合いました。(編集室)

鈴木雅の出自

川嶋 鈴木雅(すずき・まさ、1957-1940)についても、川原先生がお調べくださいました。よろしくおねがいします。

川原 鈴木雅は1957(安政4)年生まれ、お父様は沼津出身で静岡県士族の加藤信盛で、妹弟がいらっしゃいます。鈴木雅については現存する資料が乏しいなかでの研究を通してフェリス女学院に学んだとされてきましたが、近年、共立女学校(現在の横浜共立学園)にて学んだとの資料が紹介されています^{注1}。そうしますと福沢諭吉の姪御や井上馨らの子女や、ペンシルベニア女子医科大学を卒業した岡見京など、当時、アメリカに留学し上流にいらした方々と同じ時期を過ごしており、加えて桜井ちか、上田梯子、吉益亮子など捨松梅子と一緒に渡米した方が同級生ということになります。鈴木雅に関するエピソードの1つに

[司会]

川嶋みどり KAWASHIMA Midori

川原由佳里 KAWAHARA Yukari

日本赤十字看護大学

鈴木紀子 SUZUKI Noriko

看護史研究会

平尾真智子 HIRAO Machiko

看護史研究会

名原壽子 NAHARA Hisako

看護史研究会

構成 濱崎浩一[本誌]

2025年8月8日、千葉県立保健医療大学にて収録

「アメリカに留学したい」との願いをもって
いたというものがありますが、これは心から
の願いだったのであろうと思います。

19歳のときに宣教師であるジェームス・
バラによって受洗をされ、クリスチャンにな
ります。父・信盛は開拓使として函館に渡り、
明治13年に静岡に戻っており、このあたり
の時期に父が鈴木良光と結婚させたのだと思
われます。夫・鈴木良光の経歴についても詳
細ではありませんが、静岡県士族であり、陸
軍歩兵少佐として、また西南の役では大隊長
として田原坂の戦いなどで戦功をあげておら
れるそうです。

鈴木雅は良光との間に1男1女をもうけて
おられますが、良光は明治16年に病死をさ
れています。仙台の陸軍病院の記録には「転
地療養が必要」と書かれています。

明治19年、桜井女学校付属看護婦養成所
の一期生として入所、2年後に卒業され、東
京帝国大学第一病院の看護婦長になり、24年
には退職されたということです。同年、慈善
看護婦会を設立、後に名称を東京看護婦会と
変え(明治29年)、後進の指導にあたります。
その後、明治33年に東京看護婦会の会頭の
席を大関和に譲ります。

鈴木雅に関しては、看護史研究会の方々
がお孫さんである鈴木康夫さんを探し出し、
1980年代のなかばにインタビューされた記
録が残されています。

平尾 そうでした。そのような経緯がありま
した。

名原 高橋政子さんは『近代看護の夜明け』
(土曜会歴史部会著、医学書院、1978)をまとめ
るとき、鈴木雅のことを調べたかったけれど
も、係累はじめほとんどわからなくて残念だ
ったということです。それが後に、お孫さん

と会い、話をうかがうことができたのです。

鈴木雅は士族の娘で、夫の死を機に自ら看
護婦を目指し、桜井女学校付属看護婦養成所
に入ります。その前に鈴木雅は英語に長けて
いたということで、宣教師・ツルーの推薦に
より桜井女学校でアグネス・ヴェッチ(同校
教員)の通訳兼秘書をしたということです。
そのときすでに「看護婦」という職業につい
てそれなりの知識を得ていたのではないかと
思われます。

アグネス・ヴェッチについて以前は「ナイ
チンゲール看護学校」の出身とされていまし
たけれども、平尾さんの研究によって「エデ
インバラ王立救貧院病院看護学校」を卒業さ
れていたことが明らかになっています^{注2}。桜
井女学校付属看護婦養成所においてヴェッチ
はナイチンゲール方式に基づき教育をされま
した。一期生6人は共同生活をし、手探りの
状況のなかで1年間は座学で勉強し、次の1
年間は帝大病院でアグネス・ヴェッチから実
習指導を受けたということです。ヴェッチの
指導力がすばらしかったのでしょう。1年間
の教育のなかで吸収して巣立ち、すばらしい
看護実践を行いました。

注1 篠田鉷造『明治百話(上)』(昭和6年、四條書房。後に角川選書、岩
波文庫として刊行)に、大関和と思しき話者の話のなかに次の
箇所がある。「ミス・アグネス・ヴェッチ女史が帝大第一病
院で、看護婦学の教授を聞き(中略)この聴講生の員数に
加わりました。鈴木雅子さんの通訳でした。月謝が五十銭。
この鈴木雅子さんと申すのは、陸軍中佐の未亡人で、横浜
二百十番の女学校を卒業した、英語の達者な女性でした」。
文中の「横浜二百十番の女学校」が共立女学校であり、同
校卒業者名簿にも鈴木雅の名前が残されている。また、横
浜共立学園六十年史編纂委員編『横浜共立学園六十年史』
(横浜共立学園六十年史編纂委員、昭和8)中に「加藤おまささん(後
東京帝大の看護婦長となった)」(221ページ)との表記がある。
<https://hiroseorth.blogspot.com/2025/07/nhk.html>

注2 平尾真智子(1990). エディンバラ王立救貧院病院とアグネ
ス・ベッチ. 日本医史学雑誌.36(3): 211-228.

桜井女学校付属 看護婦養成所一期生の学び

川原 桜井女学校付属看護婦養成所での一期生として学んだ2年間、大関和と鈴木雅はどのような学びをしていたのか——たとえば用具やベッドが揃っていたのかなど——について、実は私には具体的なイメージが描きづらいところです。1年目の看護教育の内容は家庭看護に近いものであったであろうと想像するのですが。

鈴木 明治20年前後というと、西南戦争が終わり（明治10年）、大日本帝国憲法公布（明治22年）に向けて近代国家を作り始めた時期です。明治15年の有志共立東京病院病院開院以後、病院ができてきた時代なので、当時、看護に必要な用具やベッドなどは揃っていたのではないのでしょうか。桜井女学校校主である矢嶋楫子（やじまかじこ、1833-1925）についての映画『われ弱ければ 矢嶋楫子伝』（山田火砂子監督、2022年）を観ると——描かれているのは桜井女学校が看護教育に着手する前の様子かもしれませんが——寮生活をする女学生をきちんと育てる取り組みが画面を通して感じられました。

平尾 桜井女学校はキリスト教系ですね。

鈴木 同じ時期には同志社の新島襄が創設した京都看病婦学校があり、ここもキリスト教系です。

平尾 京都看護病婦学校に残された資料を見ますと、生徒はエプロン・洋装です。養成所内にベッドがあったかどうか。宣教師はベッドを使っていましたし、洋風ホテルもできた時期ではあるのですが。

川原 また、記録には病人食を作る場面が出てきます。当時の帝大病院の建物図が残って

いますが、そのなかに調理室を含む食堂が見当たらないのです。他にも、明治の軍医である芳賀栄次郎などが医学的な講義をされましたが、看護についてはおそらく別のどなたかが担当されたのでしょうか。わからないことがたくさんあります。

名原 断定できないことが多いですね。

川嶋 アグネス・ヴェッチは、桜井女学校付属看護婦養成所が始まってから2年目に着任されたのですか？

名原 そういうことです。タイミングよく日本に観光で訪れたアグネス・ヴェッチにツルーが帝大での実習指導を依頼したということです。

明治の宣教師と看護婦

——大関和と鈴木雅について、キリスト教とその影響についてお伺いできますか？

平尾 帝大病院に大関和が外科の看護婦取締役として勤務していたとき、「大関は仕事のうえではりっぱな対象だが、あの伝道には弱らされる」という医師の記述が残っています。大関和は植村正久牧師から受洗されているわけですから、本人としてキリスト教の信仰はかなり大きな部分を占めていたのではないかと思います。

名原 大関和が看護の道を選んだのも植村正久の勧めです。大関和のキリスト教への深まりはとても強いですね。看護と同じくらいの位置づけでキリスト教があるように感じます。布教活動イコール看護活動に近い形で大関和は取り組んでいたようです。

川嶋 草創期の看護学校はほとんどがキリスト教系ですね。桜井女学校で看護婦養成所を始めたツルーをはじめとする宣教師や伝道師

は、看護師の教育をしようという意図で来日したのではなく、布教活動をするために来日した人が看護師であったと。

名原 ツルーは、かねてから女子の経済的自立に深い関心を示していて、看護婦という職業がキリストの愛の実践、伝道にも役立つ、第一級の職業婦人の育成という信念をもって教育しました。

川嶋 たどってみますと、彼女たちはナイチンゲールにさまざまな影響を受けた人たちです。そのためナイチンゲールの「看護は看護であって、看護以外の何ものでもない」という考え方が通底しています。そのことが、当時の日本赤十字の教育とは相容れないわけです。

平尾 それは無理でしょうね。

川嶋 赤十字は当初から軍隊の救護看護師の養成として位置づけたわけですから、そういう考え方を持っている看護師では困るわけです。

視点を変えてみますと、先ほど名前が出た矢嶋楯子は婦人矯風運動に尽力され、彼女とともに大関和は女性の地位向上をめざす活動に加わりました。また、新潟に行ってからロマンスが芽生えた木下尚江など、社会運動家とのかかわりとの交流の影響が少なくないと思います。このことは、若き日のナイチンゲールが父親に連れられてヨーロッパ旅行した際、イタリアのフィレンツェでイタリア統一運動にかかわる政治的指導者や知識人が交わす意見や討論を聞き、触れ合ったことが、後のナイチンゲールの活動に影響を与えたであろうことに通じるのではないかと思います。そうした人間関係のなかで育まれた社会を見る目や闘う力が、大関和の出自としての芯にあるものに加わり、さまざまな取り組みがに結実したのではないのでしょうか。

大関和が残した本について

鈴木 大関和が著した『実地看護法』から伝わるのは、このなかに「看護の基本」が貫かれていることです。それはアグネス・ヴェッチから受けた1年間の臨床で学んだものなのか、キリスト的な考えのもとに自分で考えたものなのか私には判断できないのですけれども、今日の看護に通じる看護婦としての倫理観についてまでが、ていねいに書かれていると思います。

平尾 大関の看護に関する著作は三冊あります。『派出看護婦心得』と『実地看護法』、三冊目として『家庭看病法』という本を出しています。これは石川県立図書館にしか蔵書されていない本です^{注3}。

川嶋 『家庭看病法』という本があるのですね。

平尾 「婦人新報」に連載した原稿をまとめた大関和が残した最後の本で、大正5年発行です。『派出看護婦心得』と『実地看護法』は、看護婦教育のためのテキストとしての性格をもつ本だと思いますけれども、『家庭看病法』は、家族に看病の知識を教えなければならないという考えにたっており、その必要性に駆られ最後に出したのだろうという印象を受けます。

当時、大関和ほど看護書を書いた看護婦はいません。『実地看護法』の前半にある「看護婦心得」の項に、「患者に與ふる心身の平和は快癒を促す第一の看病法であります」と書かれています。私は日本人の看護観に関心を持っていますが、この一文を読んだときに、

注3 『家庭看病法』については、本座談会后、石川県立図書館だけでなく、秋田県立図書館、山口県立図書館にも所蔵されていることがわかりました(平尾)。

これがきつと大関が考える「看護とは」だと思いました。日本人の看護観として、すごくよい考え方です。

名原 『実地看護法』のなかに書いてあるのですね。

平尾 そうです。また、読みすすめていくと、研究についても述べられており、その箇所は「看病婦の多辯は一の不品行と申ます程悪しき事でありますから、互に慎まねばなりません、而し無言でばかり居りますれば、病人が淋しく感ずるのみならず不愉快で堪りませんから、常に面白き話を研究して置くべきであります」とあります。

さらに本書の最後に「看護婦實業の唱歌」というものが掲載されていますが、これは七五調で、看護婦のよさを歌っています。

川嶋 あれは面白いですね。

平尾 そのなかに、

採るべき注意は各おのに
備る愛の泉より
湧き出る智慧と知識をもて
自から患者の救護法
發明なして勉むべし

とあります。患者さんのためになる救護法を、習った通りにするのではなく、自分の知識と知恵をもって發明しなさいと促しています。「コミュニケーションの研究をしなさい」とか「自分で新しい看護法を考えてきなさい」という箇所からは、専門職としての芽生えをすごく感じるとともに、この明治41年に書かれた内容は今にも十分通じるものだと思います。

川嶋 私は、『実地看護法』のなかでは「腎臓病看護法」に関する記述を高く評価しています。

平尾 あの記述は実に見事です。

川嶋 要するに重症ネフローゼの13歳の少女に対し、牛乳摂取と全身清拭を行ったところ治癒したという症例です。つまり人のもつ自然治癒力に働きかけたわけです。しかも、牛乳も清拭も最初は拒否していた少女が、大関の、腎臓機能から皮膚の代謝機能、牛乳の栄養についての説明で納得して協力的になるプロセスはとても説得力があります。そうして少女は尿が出るまで改善し、正月休みを取っていた青山医師の出勤当日には、自力でトイレで排泄できるまで回復したという内容が実にリアルです。

私は講演時などで、この『実地看護法』に書かれたエピソードを紹介するのですが、講演後に「牛乳と全身清拭でどうしてネフローゼが治るのでしょうか、エビデンスは何ですか？」との質問を受けることがよくあります。(苦笑)。伝えたいのは、エビデンス云々ではなく、大関和のひたむきな実践と、その経験知をきちんと記述した点です。このエピソードには後日談があり、すっかり回復した少女は、やがて医師の妻になり満州に行って子ども5人とともに暮らしていると締められていますが、あれはすごい看護実践の記録です。

平尾 事例として示されていますから。

川嶋 それも大関和が卒業して初めてかかわった患者さんの話ですから、すごいと思います。

名原 大関和は本当に看護の経験が実に豊かなのですよね。

川嶋 常に「看護するのに自分の命を賭して行こう」というくらいです。

名原 たくさんの経験のなかから学び、さらにそれを自分なりの看護論としてきちんと言葉で伝えられることに驚きます。

鈴木雅の退職について

川嶋 鈴木雅は途中で仕事をすべて大関和に委ねます。あれにはどのような経緯があったのでしょうか？

名原 本によると、明治33年、府令の「看護婦規則」が発令されました。そのときに、なぜ看護婦規則を発令するかを記した「理由書」が作られており、さまざまな問題点が挙げられています。鈴木雅は東京看護婦会としての「東京看護婦講習所」で、乱立する「派出看護婦会」の質の低下を憂えて、当時としてはすばらしい教育内容で活動してきたのですが、それにもかかわらず、「理由書」には東京看護婦会の活動は一言も触れられておらず、即席で看護婦養成をする派出看護婦会が出てきて、それは養成になっていないために取り締まる、とされています。一生懸命に取り組む鈴木雅には、そのように言われることのショックが大きかったと書いている方がいます。あまりにもショックだったために、東京看護婦会も東京看護婦講習所も大関和に託し、息子とともに団子坂に隠居したというのです。

川嶋 鈴木雅が何歳くらいのときのことでか？

名原 43歳ですね。

川嶋 一番働き盛りなのに。

川原 さきほどの宗教との関係ですけれども、ツルーが看護婦教育をしたいと言ったときに、宣教師であるヘボンからだいぶん反対を受けています。「日本では看護は家族がやるから、看護婦をそれほど作らなくてよいのではないか」という声上がり、ヘボンから大反対を受けながらもがんばって作ったという経緯があるようです。ツルーにとっては、当時の日

本の子が置かれた状況を目にして、職業を作り女性たちを救うという、社会改革に近い意味合いで宗教活動をしたかったこともあり、桜井女学校を作ったのではないかと思います。ただし、現実には鈴木雅は軍人である夫を失った後に恩給がもらえたのですけども、東京看護婦会にその財産をすべてつぎ込み、時には無料で看護をしたりされたそうです。

平尾 始まりは慈善看護婦会でしたね。

名原 慈善看護婦会から東京看護婦会に変えるときは財産を使い果たしたといっています。先の経緯について理由の1つに、慈善看護婦会が東京看護婦会に変わった。その東京看護婦会の内紛ということを書いている方がいます。どういうことかということ、「東京看護婦会」に、廃業した娼婦の更生を引き受ける話が持ち上がっていたそうですけども。

川嶋 婦人矯風運動ですね。

名原 はい、そうです。東京看護婦会のなかには必ずしもキリスト教信者ばかりではありませんでした。活動が続くにつれ、信者ではない人が含まれてきて、キリスト教精神でならば、婦人矯風運動を続けられたかもしれないけど、とてもついていけないと東京看護婦会を辞める人が出てくるなどの内紛が起こったそうです。教会の矯風会運動に熱心な鈴木雅や大関和にとっては伝道の1つとして提案に異論はなかったが、会員から強い反発が出て、会内部に亀裂が生じた。そのことが背景にあったと書いてる方がいます。

暮らしのなかにある看護

川嶋 時間が迫ってきましたので、最後に一言ずついかがでしょうか。

鈴木 忘れてはいけないと思いますのは、わ

が国の伝染病に関する看護の始まりとして、大関和の活動がすごく重要だということです。『実地看護法』は翌年に改訂版が出され、そこには「マスクをしろ」とははじめ具体的な技術が書かれています。当時、大関和が赴任した新潟・知命堂病院産婆看護婦養成所で育った看護師たちが地元で伝染病パンデミックのときに活躍したことが記録に残っています。大関和が看護師として本を書いたことに加え、伝染病に関する看護についてもきちんと書いたことは大きな功績だと思います。

平尾 大関和の『実地看護法』の校閲をしたのは二木謙三（細菌学者、駒込病院長）です。細菌学が専門ですから、大関和の伝染病に関する記述は今読んでも正確なのです。

川原 私は、家族のなかで行われていた看護という営みを、大関和・鈴木雅が一段階ステップを上げた人たちであることを感じるとともに、その背景には、さきほど川嶋先生がおっしゃったように、それぞれの出自と、かかわった方から受けた影響があると思います。歴史の研究者として、そのことがもっと知られていくように伝えていかないといけないと考えます。今回のNHK朝の連続ドラマには、その点を伝えてほしいと思います。

名原 彼女たちは、派出看護という形でベッドサイドケアを確立したわけです。食事、排泄、起居、着替えなど、そういう基本的な看護を確立させたのが派出看護です。ベッドサイドケアこそが本来の看護だということを認識し直し、派出看護に関する関心を寄せてもらいたいと思います。

また鈴木雅は、公衆衛生にも目を向けていたとされます。明治20年11月、まだヴェッチの通訳として帝大病院の実習生であった頃から、日本最初の女医として有名な荻野吟子

と一緒に「私立大日本婦人衛生会」を組織し、女性に対して衛生知識を普及し、健康の保持増進の啓蒙活動に力を注いだといいます。明治21年2月からは毎月1回、その機関誌ともいえる『婦人衛生雑誌』を刊行し、たえず新しい看病、調理、洗濯、育児法などの普及についても努力していた、と高橋政子さんは『日本近代看護の夜明け』で述べています。保健婦の誕生以前に、地域住民への保健指導を実践していたということは、外国の文献にも触れて、幅広い看護実践についての知識を桜井女学校入学以前から持っていたとも推察できます。帝大を辞めた後、最初に川原先生がおっしゃられた「アメリカ留学を目指そうとした」というエピソードは、さらに看護学を探求したい意図があったのかもしれませんが、鈴木雅に関する文献はほとんどないとされていますが、もっと探求すべきであると今回改めて思いました。

平尾 日本人の看護論を調べるには、大関和の著作をじっくり読むことが必要だと思います。その意味からも『実地看護法』にもっと多くの人が目を通してほしいです。国立国会図書館のデジタルライブラリーでは読むことができますので、若い人もぜひ触れてほしいと思います。

川嶋 私は、看護は暮らしのなかから生まれとを考えています。戦後、看護師が働くのは病院のなかという時代が続き、40年近く前「病院から外に出よう」ということで訪問看護が制度化されたわけですが、その訪問看護の内容が暮らしのなかから生まれた看護になっているかと考えたとき、私には医療モデルの延長としての家庭看護の考え方にとどまっているのではないかと感じます。そこにはさまざまな背景や要因があると思いますが、


大きな要因として、看護教育カリキュラムのなかに「暮らし」という要素が少ないことがあると考えます。教育のなかで「実践」にはとても注力するのだけれども「暮らし目線」が欠けてると思うのです。

大関和や鈴木雅を通して考えますと、看護の原点は暮らしのなかにあり、暮らしのなかで生かされなければ本当の看護ではないと言えるかもしれません。看護は全ての人に必要な営みです。そういった意味から、看護の原点に帰るときに私は、あの時代の看護師たちのやり方から学ぶところが多いと思います。
——ありがとうございました。

刊行案内

株式会社看護の科学新社

〒161-0034 東京都新宿区上落合 2-17-4 Tel 03-6908-9005 Fax 03-6908-9010
E-mail sales@kangonokagaku.co.jp URL <https://kangonokagaku.co.jp>



派遣看護婦会の歴史

看護の歴史ライブラリーシリーズ

好評

看護史研究会 著

A5判 / 190ページ / 定価 2,530円 (税込)

派遣看護婦会は現代の訪問看護ステーションの前身ともいえる看護師の就職先の一形態で、明治・大正・昭和前期という医療保険制度のまだ整備されない時代に多数存在した。派遣看護婦会は看護師による私的経営であり、派遣料金を会則で定め、患者との個人契約で患者の自宅や病院で看護を行った。この看護のケアのレベルは高く今日でも参考になる点が多い。本書は看護の歴史だけでなく女性の自立、女子職業史の領域でも貴重な資料である。